

【原 著】

教員養成課程における福祉教育の視点から考える
道徳授業づくりの検討

—ハンディキャップのある人の教材化に関する道徳性分析から—

坂本 清美 作田 澄泰 中山 芳一

Consideration of morality class making considered from the angle of the welfare education in a teacher education course
—From a morality analysis about handicapped person's teaching materials-ization—

Kiyomi SAKAMOTO, Kiyohiro SAKUDA, Yoshikazu NAKAYAMA

2017

岡山大学教師教育開発センター紀要 第7号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.7, March 2017

教員養成課程における福祉教育の視点から考える道徳授業づくりの検討

ーハンディキャップのある人の教材化に関する道徳性分析からー

坂本 清美^{*1} 作田 澄泰^{*2} 中山 芳一^{*3}

本研究では、教職志願者の大学生を対象とし、ハンディキャップをもつ人の生き方から自己を見つめると共に、将来希望する校種における道徳授業づくりについて検討した。授業を検討する際に、福祉教育の観点を視野に入れ指導案を作成し、中心場面、プレゼンテーションソフトの活用等を含め、道徳性を高める授業づくりについて考察した。

研究にあたり、実際に各自で作成した道徳授業づくりを交流することで、福祉教育の視点から考える道徳授業づくりに必要な道徳的価値、道徳性を高める上で重要である中心場面等が明らかとなった。

キーワード：ノーマライゼーション、道徳的価値の変容、福祉と道徳授業づくり、全人的道徳教育

※1 坂本清美（元岡山大学大学院教育学研究科技術補佐員）

※2 作田澄泰（早稲田大学教師教育研究所）

※3 中山芳一（岡山大学全学教育・学生支援機構）

I はじめに

2013年度に文部科学省より、道徳授業の教科化に関する指針が出され、道徳教育への強化が行われようとしている。理由としては、2011年の大津市でのいじめ自殺問題を受け、より道徳性をもった人間力を高めることがねらいとなっており、大きくは次の二点を挙げている。

「いじめ防止に大きな期待ができる」

「学校教育の真の中核としての役割を果たせるようすべき」

として、道徳教科化が必要だとしている。¹⁾ つまり、道徳教育の教科化を通じて、さらに道徳性を培い、人の心の痛みや悲しみにふれるとともに、善を尽くし徳をつむことへの判断力の必要性を意味している。また、戦後間もない頃には、かつての「修身」が廃止され、それに代わるものとして道徳が取り入れられてきたが、教科化することは悲願とされてきた。しかし、前にも述べた「いじめ」をはじめとする様々な児童生徒に関する諸問題が後を絶たない現実がある。こうした著しいモラルの低下を改善し、児童生徒の心を磨くためにも、道徳教育の要である特設道徳授業のあり方が大きく問われようとしている。

これらの課題をふまえつつ、筆者（坂本、作田）は、文部科学省が学習指導要領（道徳編）に明記す

る道徳的価値項目をはじめとする指針だけでなく、より内容の充実した全人的な道徳授業を構築していく必要があると考える。そのためには、副読本等の文章における資料を活用した授業のみではなく、多くの人や自然等の生き方に直接ふれ、感じる必要がある。そうすることで、自分自身の姿を大きく見詰め直し、心に響くこととなる。また、国際化、福祉・特別支援教育、自然等の幅広く多面的な視点から道徳の在り方を検討していく必要がある。つまり、生きているもの全てにおいて、生きることへの意味を問う福祉と関連付けた道徳教育が重要ではないだろうか。

これまでも先行研究として、仲本(2002)は、児童文学作品における「ダウン症候群」の教材内容を分析し、ハンディキャップ者同士を囲む人々の思いにふれ、今日の福祉国家としての日本社会の在り方について考えさせる授業づくりが検討されている。しかし、仲本(2002)によると、ハンディキャップ者を題材とした教材を使用した出版社の頻度は少数に留まり、福祉に関する道徳教育の困難さが懸念される。²⁾ その他のハンディキャップ者を対象とした教材化に関する授業分析については事例が少なく、今後の福祉国家日本を取り巻く学校教育において、必要不可欠となるものと思われる。

また、道徳教育全般については、全国の小中高等

学校での道德教育が推進され、道德性が向上したという報告が幾つもなされている。しかし、児童生徒たちの心の中に真に道德心が培われているかどうかは疑問である。何故ならば、児童生徒自らが主体的に関わり、命の重さを感じ取るものない非人道的な行為が多くみられるためである。

以上の点を踏まえ、道德授業自体の在り方を大きく見直し、児童生徒たちの心に大きく響き、道德的実践力としての効果が期待できるものであることが重要である。そのためには、一時間及び、学期、一年間の中で、「何をどう考えさせたいのか」という視点が大事である。あくまでも、児童生徒自らが自律的に主体性をもち、思考、活動できることが重要である。このように主体性が育まれることにより、道德性が大きく向上しているものと思われる。そして、本稿では全人的な観点から道德性を向上させていくため、福祉教育の視点から考える道德授業づくりの必要性と目的について次に述べるものとする。

II 研究の目的

今後将来の学校教育に向けて、教職を志願者とした大学生を対象に、皆がともに社会で生きていくことのできる平等な視点（ノーマライゼーション）をもち、一部の人々だけではなく、全ての人々にとって幸福かつ、豊かな道德性をもつことができる人間育成を目的とする。また、「いじめ」問題等の非道德的な問題行動を減少させ、自然や人、あらゆる生活環境の中から、愛と心情を感じとり、多くの善を行うことのできる人間育成を目的とする。

これまでも我が国日本では、多くの道德研究が行われ、授業研究においても実施されてきた。しかし、痛ましい事件や問題行動が後を絶たず、今まで通りの道德授業であっては、将来巣立っていく児童生徒たちにとって、道德性に富んだ人間になることは難しいと筆者（坂本、作田）は指摘する。

また道德教育については、子どもたちの生活の中での生涯学習としての側面をもつと考えられており、家庭、学校、地域を行き来する子どもたちは、例えば国連の「子どもの権利条約」（1989年採択、1994年日本批准）では、大人と同じように人格と人権を尊重され、「小さな市民」「小さな主権者」として社会参加していく権利主体として明確にされている。いじめ問題にしても、学校における道德教育のみで、早急に解決できるとは言えない。学校は、単なる「教育」の場ではなく、「小さな市民」である子ど

もたちの総合的な育ちの願いを受け止め実現していく子育ての場であるということを、教員養成課程で学んでいる教員志願者の学生らにも実感してほしいと願っている。求められる「教育」の分野の役割が肥大化し、「福祉」の分野との連携が弱いとはいえ、「子育て」の概念が内包している「福祉」と「教育」と「文化・芸術」の領域に重なり合う営みが、今日の日本社会においては、分離しつつ進展しているところにも問題があるのではないかと考える。それらを踏まえ、子どもの教育と福祉をめぐる制度改革は求められている現実がある。また、教育の分野では、「いじめ」「不登校」を生み出している学校に批判が高まる中で「学校のスリム化」が叫ばれるなどの現実がある。地域での取り組みの役割は、「子育て・文化」の協同は進んだ方がいいと考える中で、学校の内外で子どもの声に耳を傾けていくことが求められ、生活をともに楽しむ姿勢が必要なのではないと思われる。そのため、今一度学校、教師の役割を考える機会が必要ではないかと考えた。

以上の側面から本研究では、教員養成課程において、ハンディキャップをもつ人の生き方を事例として取り上げ、福祉教育の視点から自己の生き方を見つめ、道德的実践力を高めるための道德授業づくりについて考察した。

III 研究方法

本研究は、教職総合実践演習において、下記に示す要領で実施した。なお、研究による講義概要、内容については、以下に示す通りである。

本稿の執筆にあたっては作田が講義実施、坂本が主たる考察、中山が全体考察を行った。なお、本研究にあたっては、実施大学の承諾を経て行っている。

<対象>

岡山県内における大学3年生、教職課程教職志願者、男性：3名、女性：15名教職実践演習15時限（90分/時限）のうち、2時限分を集中講義として行った。実施時期は2014年6月に実施した。

講義では、各々が目指す教員免許校種を想定し、以下に示す福祉に関する道德教材を基に、一時限としての道德授業を立案（略案作成）した。その後、プレゼンテーションソフトを活用し、授業を進行させるポイントとなる点についてスライドを作成し、道德授業の方法論について検討した。その際、学生たちの道德的価値分析を基に、全人的な視点から心に響く道德授業づくりが行えるよう留意した。

<福祉に関する道徳教材の内容>

自閉症、目が不自由で育ったAさんの生き方についてふれる。Aさんは、ハンディキャップをもちながらも音楽と出会い、ピアノを学ぶ。音楽(曲)を聞くことで音を脳で記憶し、ピアノで自在に演奏することができる。Aさんは音楽と出会うことで、毎日、ピアノを演奏する生きがいを得た生活を送っている。楽譜を見ることは困難だが、聴覚で一度聞いた曲は完全記憶され、ピアノを通じて曲にすることができる。こうしたハンディキャップを個性として生きている人の内容である。

IV 結果と考察

1 道徳授業づくりにおける資料の道徳的価値分析

Ⅲでの指導案の要領に沿って、大学生の自分自身が目指す校種を想定し、授業づくりを考察した。まず初めに、VTR「目の不自由な人から学ぶ」を基にして、各自が目指す校種に向けて、どのような道徳授業を立案すべきか検討した。授業立案にあたり、本資料であるVTRから、本時で目指す道徳的価値に関する中心項目について学習指導要領を参照し、検討した。その結果、大学生による希望校種ごとに考えた道徳的価値の中心項目が次のように出された。下記は、大学生が各々の希望校種ごとに考えたものをまとめたものである。

表1 道徳授業づくりにおける目指す中心項目

※道徳的価値項目の設定の数は問わない<>内は数を示す

幼稚園教諭 人数 (1名)
1-(2)希望, 勇気, 不撓不屈 1-(6)向上心, 個性伸長
小学校教諭 人数 (2名)
1-(2)希望, 勇気, 不撓不屈<2> 2-(3)信頼・友情, 助け合い
中学校, 高等学校教諭 (保健体育) (7名)
1-(2)希望, 勇気, 不撓不屈 1-(3)自主・自律
1-(6)向上心, 個性伸長<3> 2-(2)思いやり・親切<2>
2-(3)信頼・友情, 助け合い 2-(5)尊敬・感謝<3>
3-(2)生命尊重 4-(1)役割と責任の自覚
4-(3)公正・公平, 正義<2> 4-(5)家族愛

中学校, 高等学校教諭 (地歴・公民) (4名)
1-(1)思慮・反省, 節度・節制
1-(2)希望, 勇気, 不撓不屈<2>
2-(4)寛容・謙虚 2-(5)尊敬・感謝 3-(3)敬虔
高等学校教諭 (看護) (2名)
1-(6)向上心, 個性伸長 2-(2)思いやり・親切
2-(3)信頼・友情, 助け合い 2-(4)寛容・謙虚
養護教諭 (2名)
1-(6)向上心, 個性伸長
2-(2)思いやり・親切 2-(3)信頼・友情, 助け合い

☆項目別計

1-(1):1	1-(2):6	1-(3):1	1-(6):6	14
2-(2):4	2-(3):4	2-(4):2	2-(5):4	14
3-(2):1	3-(3):1			2
4-(1):1	4-(3):2	4-(5):1		4

計 34

以上の道徳的価値を考察すると、学習指導要領の示す4つの視点における道徳的価値項目が考えられており、発達段階に応じた道徳的価値が見出され、比較的、設定価値項目を拡張して検討していることが分かる。これは、学生達が授業を行うにあたって、中高生という思春期での発達段階の「いじめ」「非行」を含む、今日の学校教育問題等の背景が伺われる。

また、テーマが「目の不自由な人から学ぶ」ということもあり、自分自身で自立を目指し、日々努力していく姿が描かれているため、1または2に関する価値項目が中心となって検討されたものと思われる。

2 道徳授業づくりにおける授業の中心場面の考察

授業の組み立てにおいて、福祉教育の視点による道徳授業づくりを検討するにあたり、授業受者が道徳的思考判断、葛藤し、今後の生活の過程において、道徳的実践力として生かされていくことを目標とし、授業の中心場面を考察した。その結果、ほぼ全員の回答により、「Aさんがハンディキャップを克服し、今日も全力で頑張っている姿」を中心場面として選択していた。少数の回答では、2名の学生から、「Aさんを支えている両親の姿」とあった。大多数の上記下線部の回答の理由としては次に示す通りであった。

分にはない授業展開を交流することで、各自の心に新たな道徳的価値の設定が考え出された。

表3 スライド作成による道徳授業づくりへの効果

＜スライド作成による交流の感想より＞（抜粋による）

- ・私は「みんな違ってみんないい」という内容であったけど、感謝という視点もあって関連できた。
- ・この意見交流は、3～4人という少人数のものであるにも関わらず、誰かに見てもらうというのは、すごく自信がなくてとても不安になった。その中で、相づちを打ち、真剣に聞いてもらえたので、その面では安心感が生まれ、後半になるにつれ、とても話しやすく感じた。
- ・3人での意見交流で、3人とも違うことを考えていたので、多人数で意見交流をすると、もっと違った考えを知ったり、考えたりすることができるのだと思った。
- ・同じ映像を見ていても一人ひとり違う考えをもっている。この考えるという力が、これからは必要だと思った。
- ・同じVTRから考えた指導案でも、人により着眼点が違うので、同じ学年内で授業を行うとしたらテーマを共有し、指導案を作成する必要があると感じた。
- ・当たり前という考え方が人によって違うし、また感じ方も個性によって違ってくるものと思った。焦点をあてている場所は絶対人それぞれ違うものであるし、また、それに対する自身の意見も違って参考になった。

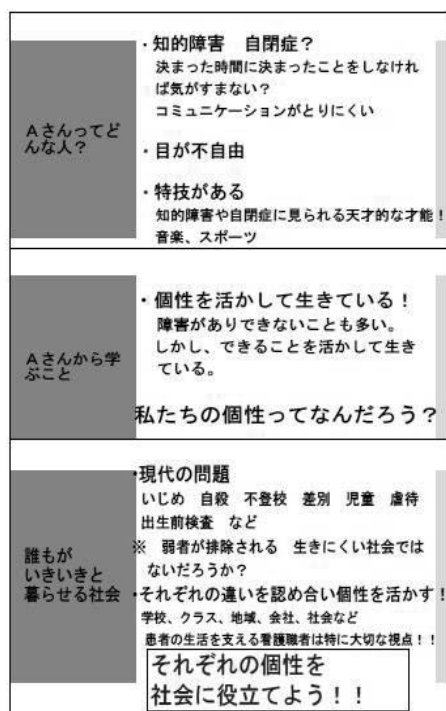
表3から分かるように、道徳授業展開のためのスライドを交流したことにより、多面的な見方・考え方がなされ、各自の心の中に新たな道徳的価値を見出した授業カリキュラムへの志向が伺われる。また、スライドのタイトルや配色等の工夫について言及されており、授業受者である相手意識をもった意識が芽生えている。その結果、学生達の心の中には、「もっと、違った面から授業をつくりたい」という肯定的な意識が高まっていった。

上記に示すように、感想の中には目的校種やスライド作成の内容によって個々に違うため、異なるスライドを交流することで、新たな価値が見出されたものと思われる。なかには交流することで、相互に相づちを打つなどし、自信につながった学生もいた。これは、スライド活用コミュニケーションにより、相互に認知された結果引き起こされた肯定的な結果

であると考えられる。

次に講義において、交流時に活用したスライドを分析する。図2に示すのは、その交流を行った時の学生（高等学校教諭〈看護〉）が作成したスライドの一例である。スライドの内容では、確かにAさんにはハンディキャップがあることが示されているが、ハンディキャップがあることを困難であるとは捉えていない。個性として生かしてできることを行い、生きようとする道徳的な視点から示されている。さらには皆平等な視点による「私たちの個性」について考えていく道徳授業づくりが考察されていることが分かる。そして、その個性を互いに認め合うことで、社会の様々な集団の中において、自己肯定感を高めていくことができる。そうすれば、自ずと社会のあらゆる集団の中から、今日のいじめ等の諸問題が減少していくはずではないだろうか。そして、スライド活用コミュニケーション行為により、道徳的価値が共有することで、各自の心で価値葛藤が生じ、新たな価値観が生まれた。図2に示すスライドを作成した学生の回答には、「親、社会への感謝」という生きていること自体への感謝の念をもった道徳性が培われていた。もはや、この学生の心の中には、ハンディキャップをもつという意識は全く感じられず、皆が平等に生きていこうとする、ノーマライゼーションとしての道徳観の表れであると感じられた。

図2 学生が作成した道徳授業展開スライド一例



なお、次にスライド活用コミュニケーションによる新たな道徳的価値を校種ごとにまとめたものを示す。

表4 スライド活用コミュニケーション後の新たな道徳的価値（一部抜粋による）

<p>幼稚園教諭 人数（1名）</p> <p><道徳的価値>個性を知る，夢，自信</p> <p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分について知り，人と比べない，自分は自分である。その個性が未来へとつながると思った。
<p>小学校教諭 人数（2名）</p> <p><道徳的価値>個性，尊敬，感謝，感動，思いやり，希望，勇気，生命尊重</p> <p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハンディキャップがあってもそれを上回る特技があつてそれで感動する人もいる。
<p>中学校，高等学校教諭（保健体育）（7名）</p> <p><道徳的価値>表現，平等，個性，生きる，幸せ，相互理解，尊敬，自由</p> <p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・表現をすることは大切であり，それは平等に与えられている。 ・人それぞれに個性があり，それは誰かが評価するものではない。 ・生きていく上で必要な能力であり，「生きる」ということはどういうことなのか分かるから。 ・一人の人間として生きる権利はあるので，ハンディキャップがあるのも個性であるし，一人の人間として平等に接することも大事であるから。 ・各自だけの理解では一方的になり，偏見につながる。
<p>中学校，高等学校教諭（地歴・公民）（4名）</p> <p><道徳的価値>幸せ，可能性，個性を大切にす，個性を受け入れる，自信</p> <p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・人と違うことは，不幸でも何でもないことを生徒に知ってほしいと思ったから。 ・ハンディキャップをかかえている人は，普通のことのできないという偏見は可能性を潰してしまうことがある。偏見をもたず，その人のことを見たとき，様々な可能性が見えてくると思ったから。 ・ハンディキャップも個性と考えるから。 ・自分に自信がない人が多すぎる。ハンディキャップがあっても「あなたはあなたでいいんだよ」ということを伝えたいから。

<p>高等学校教諭（看護）（2名）</p> <p><道徳的価値>個性伸長，地域で生きる，違いを認め合う，相手を知る，相手を受け入れる</p> <p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今の現代，いじめや自殺などの問題があるが，個性を出さず，違いを認め合えていないからではないかと思う。また，ハンディキャップのある人を施設から地域へ移行する政策が行われており，重要なテーマだと思ったため。 ・一人の人間として相手を見つめ，ありのままの相手を受け入れることから，道徳的価値がみえてくる。
<p>養護教諭（2名）</p> <p><道徳的価値>寛容の心，友達・自分の個性を大切にす，自分とは違った人を認め合う</p> <p><理由></p> <ul style="list-style-type: none"> ・個性伸長というテーマに沿って学習を考えていくと，もっといろいろな人の様々な面を見ることが大切だと自分自身が感じたので，それは広い心で物事を見る視点が必要だと思ったため。 ・「自分」の気持ちを持ち，他者を認めることで幸せを感じる。

表4の道徳的価値を見ると，対象の発達段階が高くなるにつれて，「相互理解」「認知」「幸福追求」「生きる」といった価値が見出され，社会全体で皆が平等に幸せを感じながら，生きていくことへの強い希望が感じ取れる。さらに，高等学校（看護），養護教諭では，「地域で生きる」「相手を知る」「寛容の心」という価値が見出され，社会全体で生きていくための具体的な道徳的価値が明示されていることが分かる。また，全ての校種に共通な点として，「個性」或は「個性の伸長」としての価値が見出されている。これは，ハンディキャップがあるか否かに関係なく，皆が共に認め合い，理解し合うことで，平等な社会がつくられ，真の自由と幸福感をつかむことができることを示すものと推認される。

表1のスライド活用コミュニケーション前に検討した道徳的価値と比較すると，以前にも述べた「個性」「認知・理解」「幸福追求」「寛容な心」「平等」という価値が全般的に見出されていた。また，コミュニケーション前には，「個性」としての価値は数人にみられたものの，コミュニケーション後ほど多くはなかった。さらに，表1では「思いやり」「助け合い」という価値が多く出されていたが，表4のコミュニケーション後では，「個性を受け入れる」（中学校，高等学校教諭<地歴・公民>），「違いを認め合

う) (高等学校教諭<看護>) という皆が平等である視点に立った言わば、ノーマライゼーションとしての道徳的価値が見出されている。

以上から分かるように、スライド活用コミュニケーションまでの過程を経て、相互主体的に価値が共有化され、学習指導要領で提示されている道徳的価値がさらに拡張され、社会全体としての幸福追求を目標とした視点となっている。このように福祉教育の視点から検討し、授業を立案したり、道徳的価値を分析したりすることで、真の道徳的価値の追求から、真の幸福追求へと道徳的価値が見出されてくる。こうした場合、授業受者のみでなく、立案する授業者にとっても、道徳的価値の視点が今までとは大きく違った視点から考えていくことになる。つまり、道徳授業立案に関わり、資料から道徳的価値分析をし、スライド活用コミュニケーションまでの過程を経ることにより、学生たちの心に上記で述べた新たな道徳的価値を見出すこととなる。なお、教員養成課程による福祉との関連付けによる道徳指導案作成、資料分析においては、ハンディキャップをマイナスとして捉えるのではなく、肯定的に捉え、皆が平等に幸せに生きていくことへの全人的な道徳性を見出すこととなった。

V まとめと今後の課題

1 福祉の視点から考える道徳授業づくり

IVの結果からも分かるように、Aさんというハンディキャップをもつ人から人間としての生き方を考え、はじめはAさんの生き方のみに注目した道徳的価値(個性の伸長、不撓不屈、自主自立等)であった。しかし、スライド作成及び、スライド活用コミュニケーションを行うことで、その人をハンディキャップとして見るのではなく、個性としての見方、平等、寛容な心等のノーマライゼーションとしての道徳的価値が見出された。これは、コミュニケーションを行う以前に、道徳指導案を作成し、授業進行用のスライドを作成することで、「何をどのような視点から道徳性を培いたいのか」「どのようなテーマの道徳の中心項目とするのか」について検討しながら授業を考察する過程の中で、Aさんのハンディキャップのみ着目するのではなく、一人の同じ人間としての生き方について考え出されたため、道徳的価値の変容したスライドが作成されたのではないかとと思われる。さらに、こうして作成されたスライドを用い、コミュニケーション行為により価値が共有され

ることで、「自分とは違う観点である」という意見が出され、自分自身の心の中で価値葛藤が生じたものと思われる。このような価値葛藤を通じて、これまでに生きてきた道徳的価値が大きく覆されることとなり、心の中に深く響くようになる。

次に、講義の最後に学生たちに「どのような道徳授業が道徳性を高めることができるか」という質問に対し、アンケートをとった結果の一例を紹介する。

① 今日の講義で、「個性」というものを私たちはどうとらえているか、また、表現することの素晴らしさを考えるきっかけになりました。自分が教師として、道徳授業をする際、「自分のことを考えてみる」ということを大事にしたいと考えます。相手のことは見えていても、本当の自分をきちんと見てこそ、相手のことも違った視点から見ることができると思ったからです。そうすると、「個性」についても違う見方ができると思います。表現することは、私たちが生きていくためには大切なことだと思います。表現の仕方にはたくさんの方法があることを知り、考えることができました。(中高<保健体育>)

② 道徳授業では、文科省が定めた項目に当てはまるもののみでは決して、道徳性を高めることはできないと思う。偏見を捨て、物事を見ることができたとき道徳性は高まると思う。AさんのVTRを見て、やはり人間にはすごい可能性があり、偏見があってはいけないと思った。(中社<公民>)

③ 生徒と一緒に考え、その人の立場に立って道徳を考えれば、道徳性を高められるのではないかとと思う。人間は一人ひとり違い個性があり、その個性が目に見えるもの、思考、様々な所にあるわけであり、それらを受け入れることができるよう教育に視点をおくべきだと考える。倫理やモラルや常識は学校で学ぶものではあるけれど、思いやりは自分で育てるものだから、その手助けができるように教えていきたい。(高等学校<看護>)

④ Aさんが楽しそうに生き生きと音楽活動をしていた姿が忘れられません。“生きがい”をもつことは本当に人を変えるのではないかと思います。また、Aさんはハンディキャップをもっているが、“できないこと”に目を向けるのではなく、

“できるところ”に目を向けることが大切だと気づかされました。道徳性を高めるためには、人と違ったところを認め合い、自分を大切に考えることのできるような授業が必要だと考えます。(養護教諭)

以上のアンケートの記述にもあるように、「個性」としての捉え方をもつことにより、心の中に、皆が平等に暮らしていける社会としての視点をもつことができたものと思われる。これは、言わば、ノーマライゼーションとしての皆が平等に幸福を追求していくための、より善い生き方を念頭においた道徳教育を目指すことに気づくことができたものと思われる。特に④では、その人の立場に立った考え方をを行うことで、自他の尊厳を重視した道徳的な見方・考え方をを行う必要がある点について述べられている。

では一体何故、このような福祉としての見方・考え方をもちた道徳教育が必要なのだろうか。それには、この社会で暮らす人々という視点になって考えた時、私たち健常者のみがこの世で暮らす生命ではない点にある。さらには、他の動植物、自然を含む、ありとあらゆる地球上の環境の中で、私たちは生かされている点も軽視できない。こうした側面から、「生きる」ということを考えた時、決して自分たちだけが生きている社会ではないことは分かるはずである。その他にも、多くの言語、文化の違う国々の人達、高齢の人達、幼い子どもたち等、様々な人々がこの全世界に暮らしている。その中で、私たち一人ひとりも社会の一員として、どう生きていくのかについて考えることができ、より道徳的に善く生きようとする意欲が高まってこそ、道徳的実践力も向上し、皆が幸せに暮らせる社会を創ることができる。そして、道徳的実践力を誠の意味において身につけていくためには、「生きる」という意味をさらにグローバルな視点から考えていく必要がある。

本研究では、Aさんという一人のハンディキャップをもった人間のVTRをきっかけとして、道徳的に生きることへの全人的な追求により、どうあるべきことがより善く生きることにつながるのか、真に心に問いかけることで、道徳教育を考えさせられた授業づくりとなった。前にも述べたように、道徳的に生きるとは、「より善く生きる」ことであり、より善く生きるためには、皆が平等に幸せに暮らしていける社会をつくっていくことが大切である。そのためには、発達段階に応じた学校教育における道徳授業

をより、多面的な視点から検討していく必要がある。

さらには、どのような道徳授業づくりにおいても、授業受者に何をどのような視点から道徳性を高めていくのか、具体的なカリキュラムづくりの構成を考えていかななくてはならない。そのためには、②の意見にもあるように、文部科学省が例として挙げる価値項目によるもののみであっては、本当の意味での道徳性は高まらないかも知れない。つまり、一つの題材の中からも多面的な見方・考え方を見出すことにより、潜在的な多くの道徳的価値は存在することとなる。本研究の場合、一見、ハンディキャップをもったAさんに着目すると、「努力」「不撓不屈」「家族愛」などといった、Aさん本人の努力する視点による道徳的価値の設定となりがちである。しかし、本研究の結果、プレゼンテーション活用コミュニケーションにより、一方からの道徳的価値の見方・考え方ではなく、「個性」「尊厳」「相互理解」「認知」「平等」などの道徳的価値が拡張化された、皆が幸福に生きていくための道徳的価値に変容した。このように、福祉の視点から道徳授業を考察することで、授業立案者自身も「皆が平等に幸せに生きることができる」といった概念をもち、福祉としての道徳的価値が高まることとなる。

また、授業活用におけるスライド作成を行うことで、本時で授業者が何をどのような視点で道徳授業を構築し、どのような道徳性を培っていきたいのか明確になってくる。こうした、授業者の綿密な準備により、授業受者にとって、どのような視点から本時の道徳授業を受け、思考・判断を行っていけばよいのか考えさせられることとなる。そして、さらには、道徳的価値の拡張、道徳性、道徳的実践力を高めていくこととなり、教師力の向上へとつながる。

2 「誠の道徳性」を高める魅力ある授業づくりと今後の課題

「誠」の道徳性を高めていくために必要なこととして次の点を指摘する。

- ① 資料の内容を多面的な角度から考察し、拡張した道徳的価値分析を行う。
- ② VTR、スライド等を活用し、授業受者にとって、興味関心をもち、自分自身のこととして考えやすい魅力あるものを用いる。
- ③ 皆が幸せに生きること（全人教育、福祉）の視点から、道徳的価値を考え、人間としての本質的な生き方を追求した授業づくりにする。

- ④ 授業受者が考えやすい題材（人物、自然等）を用意し、授業形態（展開等）を工夫する。
- ⑤ 中心場面を必ず設定し、授業受者たちが主体的に考え、葛藤、判断していく場面を多く取り入れた授業づくりを行う。

特に、⑤のように中心場面を設定し、主体的かつ、自分自身のこととして捉えることができるような授業づくりを行っていく必要がある。つまり、「考えてみたい」「自分だったらどうするだろう？」というように自分自身のこととしての関心を持ち、考え、判断することで道徳性が高まっていくこととなる。こうした過程の中で、ときには心に深く感じたり、あまりの悲しさであったりして涙を流す場面も起こり得るかも知れない。しかし、こうした大きな葛藤場面を通じて、人は大きく成長し、道徳性も高まることとなる。

また、③のように皆が幸せに生きることのできる、福祉としての視点から道徳授業づくりを行うことで、「一人の社会の人間としての生き方」による誠の道徳性を高めることになると考えられる。②でも挙げたように、資料を選択するとき重要な点として、授業受者にとって興味・関心を抱くものでなくてはならない。また、興味・関心を抱くとは、授業受者にとって、今日の課題として心に響くものでなくてはならない。例えば、いじめ等の問題が起きている集団であれば、いじめに関する資料を用い、かつ発段階も同等のものを扱う方がよいと思われる。本資料の場合においては、福祉という視点から、健常者のみを対象にした生き方を考えるのではなく、全ての人々がともに幸せに暮らしていくことのできるといった道徳的価値を見出し、自分自身の生き方を見つめ直してほしいという強い願いが込められている。そして、このように人物の生き方から学ぶことで、自分自身の生き方と対比して道徳的価値について考え、自分自身の今後の生き方を改善させていくことにつながる。つまり、授業受者にあった資料内容を選択し、VTR やスライドを用いて、視覚的に訴えていくことで、効果的に働いたものと思われる。また、授業進行のためにスライドを作成することで、中心道徳思考部分が明確になり、授業受者にとって、どこの部分を中心に考え、判断していけばよいか分かり、道徳性の変容にも大きな効果をもたらすものと予測される。実際にも本講義において、大

学生がスライドを作成し、交流することで、道徳的価値も大きな変容を遂げることができていた。

本研究では、教員養成課程において、Aさんの資料を基にし、道徳的価値分析について、スライド作成コミュニケーションを経て、道徳的価値が多面的な角度から考察されることとなった。そして、今後、教員となる大学生にとって、ノーマライゼーション、福祉としての道徳意識が高まったこととなる。こうした道徳的価値を授業立案者が抱くことにより、授業受者への道徳の教授の方法、培いたい道徳性も大きく変容していくものと思われる。したがって、授業者である立案者がどのような道徳性を培おうとしているかによって、授業受者の道徳心も大きく変わってくるかが予想される。また、授業者である授業立案者が、授業受者にとって高い関心を抱く題材を用意し、授業受者たちにとって今日課題となっていることを多面的な角度から考察した道徳的価値を設定することが重要である。そして、本時で明確な道徳的価値分析を行い、授業受者にとって、道徳的思考を行いやすくするためにスライド活用等を行い、関心を抱くようにすることが大切である。

今後の課題として、本研究では、福祉の視点から考えた道徳授業づくりについて、スライド作成コミュニケーションによる道徳的価値が全人的な視点により拡張することが分かってきた。しかし、対象である教職を目指す大学生での講義はまだ、一カ年のみの実践であり、今後も福祉教育の視点から考える道徳授業づくりを実践し、他年度の実践と比較分析する必要がある。また、本講義においては、対象が成人である大学生であったため、スライド作成コミュニケーションにより、他者の意見を尊重しつつ、有意義なコミュニケーション行為が成され、道徳的価値は「個性」「幸せ」「平等」「相互理解」等の広い視点に立ったものへと変容した。しかし、授業受者が発段階によっては、幼い場合、同じような道徳的価値が見出せるかどうかは不透明である。そのため、より道徳的価値を深め、全的に皆が幸せに暮らしていくことのできる、より善い生活に向けた授業づくりを再検討していくことが必要である。今後は社会全体として、主に他教科の学びや学校の子どもの生活・体験活動と連携した言語活動の充実を深める方向性と合わせ、道徳性を深め、皆が幸せに暮らせるための道徳授業づくりに関する研究を行っていく。

参考文献

- (1) 江田 裕介『特別支援教育における ICT の利用に対する関係者の意識－テレビ会議システムによるフォーラムの研修効果－』和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 24, pp.153-159, 2014
- (2) 日本道徳教育学会『道徳と教育』2010
- (3) 光田 尚美『道徳教育における身体性の問題：ペスタロッチーの「道徳的基礎陶冶」における「行為の練習」の意味』関西福祉大学社会福祉学部研究紀要 2号, pp.29-37,2013
- (4) 坂本雅俊『養護学校における福祉教育のあり方に関する一考察：全国養護学校「福祉教育調査」より』長崎国際大学論叢 2号, pp.165-173, 2002
- (5) 村田昇, 大谷光永『これからの道徳教育』東信堂, 1997
- (6) 『平成 26 年度 広島県相談支援従事者初任者研修資料』広島県, 広島県立ハンディキャップ者リハビリテーションセンター, 2014

引用文献・註

- 1) NHK 解説教室 時論公論「道徳を教科にするのはなぜ？」
<http://www.nhk.or.jp/kAisetsu-blog/100/174520.html> 最終閲覧日 2016.12.17
- 2) 仲本美央『児童文学作品を通して「ダウン症候群」を学ぶ(1)：『ぼくのお姉さん』の内容分析』育英短期大学研究紀要 19, pp9-22, 2002

Consideration of morality class making considered from the angle of the welfare education in a teacher education course

—From a morality analysis about handicapped person's teaching materials-ization—

Kiyomi Sakamoto*1, Kiyohiro SAKUDA*2, Yoshikazu NAKAYAMA*3

(Abstract)

I made a college student of a schoolteaching candidate the subject by this research and considered morality class making which can put odds in koutane where I'll look at oneself from a life-style of handicapped person as well as hope in the future. It could come in sight and a guidance plan was made, and the angle of the welfare education was considered about class making which raises morality including a central situation and utilization of presentation software, etc. in the case when the class is considered.

When it was studied, the moral value necessary to morality class making it was to interchange and to consider made morality class making from the angle of the welfare education and the central situation which is important when raising morality, etc. were respectively actually and became clear.

Keywords: Normalization, Change in the moral value, Welfare and morality class making, Complete man-like moral education

※1 Former Okayama University graduate school pedagogy postgraduate course technological assistance one

※2 Waseda University institute of teacher education

※3 Okayama University whole school education and student support organization
